

# 松村通信第 1 5 3 号

10 月 20 日

松村勝弘

## 島田克美先生（その1）

今回は私淑していた島田先生のことを書こうと思います。

**近況** そのまえにわたしの近況を書きたいと思います。最近自宅とオフィスとの往復の毎日です。オフィスでは机に向かってパソコンをしているか読書をしています。パソコンではフェイスブックでさまざまな人と交流しています。読んでいるとその人の近況がわかります。わたしは毎日書きこんでアップするようにしています。だから、毎日書きこんでいる人同士なら長らく会わなくても毎日会っているような感覚になります。そしてそのわたしのアップした言葉や写真に対して、ツッコミを入れてくる人があります。それに応えるのは楽しみではあります。西陣校同窓の O 君などもそのひとりです。立命館大学校友会のつながりの友人も多いです。

**乱読** 読書は乱読です。自分の専門に近い本も多いですが、リタイア後は気の向くままに読み進める本が多くなりました。歴史、宗教、哲学、思想に関する本も現役時代よりよく読むようになりました。そんな読んだ本の一部を先に書いたフェイスブックに「今日の一言」と称して、アップしたりしています。読むきっかけは他の何かを読んでいて気になって読むことが多いです。アマゾンなどで買うこともあります。大学の図書館や京都市の図書館で借りることも多いのです。パソコンでそれらの蔵書を検索できるので、貸し出しの予約をかけておいたら、「在庫」がなくても関連の図書館（大学なら他キャンパスの図書であり、京都市なら他の分館の図書がそうです）から、届きましたという連絡が来たら、借りに行くことができます。

**散歩** でも、机に向かっていただけだと、運動不足になります。そこで心がけて歩くようにしています。毎日 30 分、約三千歩が目安です。さすがに今年の夏は暑かったので、一番暑い時期は散歩もお休みしました。今年の

京都の猛暑日（最高気温 35 度以上）の日は、7 月から 9 月の三ヵ月間に 53 日もありました。実は 6 月にも 1 日猛暑日があって、京都の今年のも暑日は 54 日という新記録でした。近辺を散歩していると、いろんなことがわかります。オフィス近辺の西ノ京あたりでは、古い連棟の建物が結構残っています。また町家でも以前に建ったものは隣家とのあいだに隙間がありません。それが新築物件となると、隣家の壁との間に隙間が空くように立てられています。建築基準法なども改正され法律やその解釈も厳しくなっているのだと思います。そんな眼で町を眺めていると、散歩していても飽きがきません。

自分も高齢になってきたので感ずるのですが、町中にベンチが少ないことです。疲れても座るところがありません。公園にはベンチも公衆便所もあって、よく利用させてもらっています。歳を取って頻尿気味になってきましたので、散歩をするにしても、公衆便所の場所を確認する必要があります。スーパーなどのトイレもよく利用させてもらっています。それで、よく利用させてもらっているスーパーで何かを買う「義理」が生じます。義務ではありません。義理です。ちょっとしたお菓子を買ったりします。酒飲みなのでかつてはあまり菓子は食べなかったのですが、近頃はコーヒーと一緒にちょっとしたお菓子を食べることが多くなりました。

**食事** あるときから無理をした報いというべきか、膝が悪いので体重には気を遣っています。それで毎朝体重を量るのが日課になっています。また毎朝、軽い体操をします。あまり体重計をみて一喜一憂するのは避けるようにしています。外食をすると必ず体重が増えています。外食といっても「飲み会」です。飲みながら食べると、どうしても量が多くなるようです。でも、歳をとると食べるのが楽しみになってきました。しつこいものはあまり食べません。脂質の多い食べ物を食べるとかならずといっていいほど、体重が増えます。とはいえ、たまには食べたいものです。

**ありがたい** とにかく、高齢になって、この先も長くは生きられないと思うと、あらゆるものが愛おしく感じられます。街を歩いている人すべてが自分の知り合いのような気分になります。今同じ空気を吸っているのだと思うと、何とも楽しく感じられるものです。近年はすべてにおいて、感謝、感謝の毎日です。かつて、高齢の某先生が「ありがたいことに」としょっちゅう言うておられたのを思い出します。そしてその気持ちが良くわかるようになりました。

そうだ、島田先生のことを書くためにこれを書いていたのでした。「本題」へ戻りたいと思います。

**官僚、そして住商から大学へ** 島田克美先生のことを覚えておられる方もあると思います。私はとりわけ晩年(最晩年といえるだろうが)に手紙のやりとりをして、ある種先生に私淑していました。先生は年齢的にも 20 歳近く先輩であり、晩年までいろんな書物を書かれていました。島田先生は 1926 年 1 月 3 日生まれで、今年 2024 年 1 月 23 日に 98 歳で亡くなりました。ウィキペディアではまだ没年が書いてありません。主著は『商社商権論』(東洋経済新報社、1990)です。先生は 1947 年東京帝国大学法学部を卒業され、1948 年に人事院に任用されました。当時、上級官僚は人事院で一括採用され、各省庁に配属されたんだとうかがいました。その後、公正取引委員会や経済企画庁で官僚として、色々な事に関わられました。経済白書などにも関わられたようです。その後、1967 年に住友商事に入社され、津田社長のそばで社長室長のような仕事をされ、商社の内情を知るところとなり、それが主著につながったわけです。

ところが詳しくは知りませんが、年齢的にも会社では扱いにくかったのだらうと思われそうですが、大学の教授の道に転身されました。最初は 1986 年に京都学園大学、その後 1989 年からは流通経済大学で教育研究を行われました。京都学園大学赴任の前後から島田先生との交流が始まりました。その前には証券経済学会でおつきあいをしていましたが、京都に来られてからは交流も深まったと思います。官僚から住商時代を通じて、先生は調査マンと自負されていました。篠田武司先生、奥村宏先生、龍昇吉先生らと科学研究費で共同研

究したのも思い出します。その成果は「日本型資本主義の経済分析」と題して『証券経済』第 184 号(1993 年 6 月)に発表しました。私以外みんな物故者です。

**晩年の交流** 先生の晩年、最晩年まで交流が続いたのですが、その間、梅ヶ丘のご自宅に何度かうかがいました。先に亡くなられた奥様ともご挨拶させていただきました。お手紙のやりとりではいろいろなアドバイスを頂き勉強をさせていただきました。

調べてみると、私と島田先生との手紙のやりとりは、2011 年のものが保存していたものでもっとも古いものでした。その時々のお話、そしてその時私に関心があった話題が取り上げられていて、手紙のやりとりには一貫性はありませんし、ここでいちいち紹介はしません。ただ、このとき以後、島田先生がどんな問題に関心を持たれていたのかは、先生の著書などでフォローできます。

ここでは、島田先生の晩年の著書などあまり知られていないものを中心に紹介し、私が思ったことをのべていきたいと思います。

**親鸞教** 島田先生は晩年親鸞について調べ書かれています。『親鸞教の歴史ドラマ——忘れえぬ著者たち——』(ライフリサーチプレス、2006 年)がそれです。この本では、まさに調査マンとしての先生のやり方が貫かれています。私自身、この本をきっかけに親鸞に関心を持つようになりました。私家版のようなもので、紹介してもらえれば差し上げます、というので私の門下を何人か紹介しました。定価はだから印刷されていません。けれどアマゾンやヤフーで中古図書としてアップされています。値段は様々でした。

先生は石川県で生まれられ、東京で育たれましたが、お父様の出身地の五箇山までいろいろ調べに行っただと言われていたのを思い出します。そしてこの本の末尾に島田先生の思い、思い入れをみることができます。

**島田先生の優しさの根源** 「私は『本願力にあいぬれば、むなしくすぐるひとぞなき』という親鸞の和讃の文句を眼にして、心を打たれました。」(212 頁)<sup>1)</sup>こう言って、「インドから日本までの浄土教の伝統の中に、すべての人に『空しくない』人生を恵むという、いわば人類的なスケールの願いが含まれていることを、知ることができます。」(213 頁)先

生は、このように解釈されています。そしてこれは島田先生の人生経験の中で感じられたことであることがわかります。そしてそのことが先生の優しさになったのだらうと思われる。私も先生の優しさに救われた一人ですが、最末尾で言われていることに、あらためて感銘を受けます。

「これまでの長い人生の中で、私も組織の中で暮らし、時には、自分が正当に扱われているのか、と疑い、他方、部下といわれる人々を公正に扱うことができなかったのではない、という思いもあります。これは大変難しい問題ですが、たとえばここで、誰にも空しくない人生を送らせるのが仏の本意あるいは悲願なのだという一言を、心に刻んで、これが踏ん張りどころだと、考えたら、どういう世界が開けてくるのでしょうか。

親鸞が本願力にあいぬれば、といい、『あう』という言葉を使っているのは、親鸞の仏教が、『覚り』の仏教ではなくて、『信』の仏教であることをよく示しています。自分の外に仏というものを意識しその慈悲を感じて生きるための方法として、念仏の力を借りようとしたのが、親鸞だったのではないかと思います。……『信』は、実は向こうから来るのだ、といわれたら、人はそれを待ちつつ念仏するかもしれません。」(216-217頁)

**煩惱即菩提** 「親鸞の『煩惱を断たずに涅槃を得る』という説」(170頁)は、私にとって親鸞の一番好きなのところです。ウィキペディアに「煩惱即菩提」についての親鸞の理解についてこう書いてあります。

「『正信念仏偈』上に『能発一念喜愛心不断煩惱得涅槃』と示される。『よく教えを信じて、一念（非常に短い時間）で喜びの心を起こすことができるならば、煩惱をなくさないままに、煩惱の支配を受けない涅槃という境地に至ることができる』という意味である。この考えを説く親鸞の思想は『煩惱即菩提』の1つの典型例を示したものといえる[岩波仏教辞典]。』

親鸞が煩惱多き僧であったことはたしかなようです。それで悩んで、また庶民の救済のために布教するに当たって説いていたことが、煩惱についての親鸞の理解につながったように思います。島田先生も言っています。

「覚りによって煩惱を離れるということ、

親鸞はどうみていたか」といって、歎異抄十三章に、『煩惱を断じなば、すなはち、仏になり、仏のためには、五劫思惟の願、その詮なくやましまさん』とあります。五劫の思惟というのは、阿弥陀仏の前身の法蔵菩薩が、ほとんど無限の長い時間をかけてお経にいう四十八の誓願を立てたという由来をさします。それは何のためか。もし人間に煩惱を断つことができるなら、それはもう仏だから、そういう存在のためには請願も何もいらぬ、仏教もいらぬはずだ、生身の人間は煩惱から離れられないからこそ、仏の願が要るのだと。」(161-162頁)

煩惱多き私など、これで親鸞を身近に感じたものです。なお、島田先生は「ただの現実肯定でない」(170頁)とも言われています。

**空、自然法爾** 島田先生は「大乘仏教に空(くう)は欠かせないか」(172頁)と論じ、「親鸞は『空』をどう扱ったか」(177頁)と展開し、「空の論に深入りする必要がないと判断した」(179頁)といわれます。だからといって、「親鸞は、複雑な仏教の議論をしなかったか、ということ、そうでもない」(181頁)といい、「自然法爾を言い出した」(182頁)ので、「多くの場合、自然法爾こそ晩年の親鸞が到達した最高の境地だと評価され、これは空の立場と同じ内容だというような理由づけをされています。」(182頁)という。

自然法爾は私には難しいのですが、これを島田先生の本から引用して考えてみます。

「それとともに親鸞の場合、阿弥陀仏のイメージを実体的な存在から離して、無形のものにしていったということが、現代の多くの論者によって高く評価されています。いわゆる『人格神』としての阿弥陀仏というのは、現代人には『つくり話』として否定的に見られるけれども、親鸞はその点をつきつめて、無形のものにしたのだと。その意味で上記の『自然』が『空』にも通ずるというようにみられています。また思想を論ずる学者は、それを絶対とか無限とか、宇宙の真理などと言いかえる例も多いのです。それは西洋の哲学とのつながりでいわれるのですが、無限とか絶対とか言うだけで、親鸞を合理化できたと考えるのは論者の一人よがりのようにも思います(……)。

親鸞の『自然』に高い評価を与える思想は、

『信』よりも空のような『理』を重視し、これをさることが大乘仏教の基本だとみているようですが、そういう立場のなかに親鸞を引きずり込もうとすることは、浄土教的でない『日本化』のように思われます。」(184-185頁)

さしあたり、ここではあるがまま、自然体でいることがもっとも大切だといっていると理解しておきたい<sup>2)</sup>。

**他力本願** 親鸞というと、なんといっても「他力本願」が思い出されます。これをどう考えたらいいのか、先生に導かれながら、考えてみたいと思います。ウィキペディアでは簡潔にこれについて書かれています。

「自らの修行によって悟りを得るのではなく、阿弥陀仏の本願に頼って成仏することを意味している。

ここでの『他力』の『他』とは、もっぱら阿弥陀如来を指し、『力』とは如来の本願力(はたらき)をいう。

『本願』とは、あらゆる人々を仏に成らしめようとする[阿弥陀仏の]願いのことであり、人間の欲望を満たすような願いのことではないとされる。」([内松村注])

自力と他力の違いを島田先生は、このようにいわれています。

「成仏の仏教に対立するのが往生の仏教で、後者は中国の善導と日本の法然が唱えたものです。これについて袴谷は成仏を自力、往生を他力と呼んでいます。ここで袴谷が自力というのは、自己に内在する菩提心を根拠に置くことであり、それを認めないのが他力である、と。つまり、念仏往生の教義でも菩提心をベースにしているのは、自力であり、実は成仏を目標にしているというわけです。そこで、親鸞はどうかというと、かなり菩提心ということを言っています。ただ、他力の徹底を唱えたのも親鸞で、親鸞は他力の中の自力を排除する、つまり、それは本当の往生ではないといいました。その場合の自力というのは、自分の善行に頼ることです。」(195-196頁)

「親鸞が菩提心という場合、大抵は、仏の側のことで、人間の菩提心は仏の側の働きかけのもとで与えられるものですから、自力主義のように、衆生にもともと菩提心があるという論理にはなっていません。」(203頁)

**現在の風潮と先生の経験から** 現在の風潮と

絡めて、島田先生の経験から論じられています。すなわち「今の世の中では、自力主義が流行しているようです。自己責任ともいわれます。しかし、自分の思うようにならなかったことや、人からいろいろいわれたりしたことが、みな自分の至らなさや、努力不足のせいだと思わなければいけないのでしょうか。」(216頁)現在の自己責任原則を批判的にみて、そしてさらに、先生の経験と絡めて論じられます。ここで再度引用したいと思います。

「誰にも空しくない人生を送らせるのが仏の本意あるいは悲願なのだという一言を、心に刻んで、これが踏ん張りどころだと、考えたら、どういう世界が開けてくるのでしょうか。

……自分の外に仏というものを意識しその慈悲を感じて生きるための方法として、念仏の力を借りようとしたのが、親鸞だったのではないかと思います。……『信』は、実は向こうから来るのだ、といわれたら、人はそれを待ちつつ念仏するかもしれません。」

(216-217頁)

「あとがき」で、やっと初めてのお孫さんにめぐまれたが、その生涯を生きる応援歌として、親鸞の言葉が支えになってくれるのではないかと期待されています。この本は先生のお孫さんへの贈り物ではなかったかと思えます。

『親鸞教の歴史ドラマ』を紹介するだけで、かなりの字数になってしまいました。続きは次回に(その2)として書きたいと思っています。

――

1)『浄土高僧和讃』129に「<sup>ほんぐわんりき</sup>衆願力にあひぬればむなしく<sup>しよくすい</sup>ずぐるひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩悩の濁水へだてなし」とある(伊藤博之校注『歎異抄三帖和讃』新潮社、1981年、104頁)。

2)琳空山慶宗寺のサイトにおける「自然法爾」を参照した(<https://www.link-age.or.jp/shinran/jinenhouni/>)。また、ひろさちやは、『自然法爾』とは、瞬間瞬間にあらわれることが、ほとけさまの『出た目』であり、すべてがほとけさまのあらわれということです。だから、おのがはからいを捨ててあるがままにおまかせするわけです(ひろさちや『ひろさちやと読む歎異抄 心を豊かにする親鸞の教え』日本実業出版社、2010年、101-102頁)といっています。

**HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。**

皆さんのご意見を歓迎します。HP(<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>)もご覧下さい。

**フェイスブック**もやっています。また、メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい([matumura@mba.ritsumei.ac.jp](mailto:matumura@mba.ritsumei.ac.jp))。